

現代ドイツの囲碁事情 (3)

杉 浦 康 則

1 はじめに

私は「ドイツ囲碁史研究 (1)」¹において、自らの研究の方向性を述べる中で 21 世紀初頭のドイツ囲碁界の好況に言及し、『ドイツ碁新聞』(Deutsche Go-Zeitung) 2004 年第 6 号に掲載されたトビアス・ベルベン (Tobias Berben) による次の記事を引用した:

現在、ドイツ碁連盟における最も喜ばしい発展の 1 つは、おそらく構成員数の発展である。マルティン・シュティアスニーはドイツ碁新聞の 2004 年第 1 号において構成員数が約 1800 であること、そして 2003 年の成長を 10.8% と記録できることを誇らしく告げることができたのであるが、それは今年さらに上昇した。11.3% の成長の下、構成員 2000 人が間近である。さらにこのままだければ、私たちは本気で 5000 人の記録を次の目標として視野に入れるべきだろう!²

また、「現代ドイツの囲碁事情 (2)」³においては、このようなドイツ囲碁界の好況をもたらした要因の 1 つが『ヒカルの碁』であったことに言及し、当時の活気に満ちたドイツ囲碁界の様子について叙述した。しかし、日本における囲碁の状況を知る者が上述のベルベンの記事を読んだ場合、「本当にそれほど都合よく事態が進展するのだろうか」という疑念を抱いたに違いない。「現代ドイツの囲碁事情 (2)」において指摘した通り、確かに『ヒカルの碁』は日本で囲碁ブームを巻き起こし、2000 年以降、囲碁人口の減少に歯止めがかかった⁴。ただし、それは一時的な現象にすぎず、次の表の数値が示すように日本の囲碁人口はその後、大幅に減少していったのである⁵。

年	2002	2003	2004	2005	2006	2007
参加人口	4800000	4200000	4500000	3500000	3600000	2400000
	2008	2009	2010	2011	2012	2013
	2500000	6400000	6100000	3800000	4000000	2800000

このような日本の状況に対し、ドイツ碁連盟 (Deutscher Go-Bund) の構成員数については、2007 年 9 月末の時点で約 2100 であることがマルティン・シュティアスニー (Martin Stiassny) によって連盟の討論フォーラムで述べられており⁶、2008 年には構成員数が 2117 から 2080 に減少したこと、そして 2009 年には増加に転じ、2010 年 1 月 15 日の時点で 2140 であることが、2010 年の代表者会議 (Delegiertenversammlung) への招待状に言及されている⁷。つまりベルベンの記事が掲載された後、構成員数は微増するにとどまったということになるが、日本における囲碁人口の減少を視野に入れば、この状況をあまりにも悲観

的に捉える必要はないように思われる。そして事実、2013年にアルフレート・エーベルト (Alfred Ebert) は討論フォーラムにおいて、当時のことを次のように述べている：

私が囲碁を打ち始めてから多くのことが改善され、囲碁界は明確に安定性を増した。ドイツ碁連盟が過去に手にし、そしてまた [...] 利用した、比較的大きな [...] 2度のチャンスが私の目に浮かぶ。第1にインターネット:機能する討論フォーラムを伴う[...] 巧みなインターネットへの登場と、多くの参加者を伴う複数リーグ制のインターネットブンデスリーグがある。第2にヒカルの碁:構成員数が約1500から2200へ上昇した。⁸

このように、ドイツ囲碁界の発展のチャンスを利用することができた時期として、エーベルトはこの時期を捉えている。しかし他方では、アンネ・トリンクス (Anne Trink) のように当時の状況に不満を抱き、革新を求める者もいた。2010年、トリンクスは「ドイツ碁連盟の原則:伝統か革新か」という記事を『ドイツ碁新聞』において連載するが、連載記事第3回には、おそらくアジアの国の公園で囲碁を打つ2人とそれを見守る1人の写真が掲載されている。この3人は皆、かなりの年配であるように思われる。そしてその後方には、囲碁の対局に無関心な様子で通り過ぎる若者が写っている。彼女はドイツの囲碁の未来がこのようになってはならないと警鐘を鳴らし、連載記事第3回を開始しているのである⁹。

トリンクスがこの連載記事を書いた頃、つまり『ヒカルの碁』の来独から数年後、確かにベルベンによる記事において期待されていたような爆発的な構成員数の増加は起こらなかった。しかし上述の通り、構成員数はわずかながらも増加傾向にあり、その状況を必ずしも悲観的にとらえる必要はないように思われる。では、どのような理由で彼女はこのような記事を連載したのか。それを明らかにするために、本稿ではまず当時のドイツ囲碁界が置かれた状況を概観する。その上でトリンクスの記事、さらには彼女の記事に対する読者の投書から、当時どのような革新が望まれていたのかを詳細に示し、本研究の3手目とする。

2 ドイツ囲碁界が置かれた状況

本稿が焦点を当てるのは2005年頃から2013年頃までのドイツ囲碁界となるが、この期間中、かなり長期に渡りドイツ碁連盟のテーマであり続けたのは、2012年にドイツで開催されたヨーロッパ碁コンGRESS (Europäischer Go-Kongress) であった。『ドイツ碁新聞』2012年第4号によると、2008年レクサンドでの碁コンGRESSにおいて、4年後の2012年にドイツでコンGRESSを開催することが決定された¹⁰。それから開催計画が開始されたものの、最初の2年間は何も進展せず¹¹、それどころか開催予定地とされていたケルンが適切な場所なのか疑問視されるという事態となり¹²、さらにお金も人員も不足していることが明らかとなっていった。このような状況において2010年、連盟会長ミヒャエル・マルツ (Michael Marz)¹³、連盟前会長ベルンハルト・クラフト (Bernhard Kraft)、モニカ・ライムペル (Monika Reimpell)、マーニャ・マルツ (Manja Marz) が活動を開始し、開催地はボン近郊のパート・ゴースベルクに決定された。その後、次第にライムペルとマーニャが指揮を執るようになり、何とかコンGRESS開催に至った。開催に至るまでに困難が続いたものの、2012年

7月21日から8月4日の碁コンGRESは参加者たちから高評価を得ることとなった¹⁴。

2012年の碁コンGRESに並び、この時期のドイツ国内のさらなる囲碁活動の中で特に注目すべきは、ブンデスリーガの成功がさらなる囲碁活動の推進力となったことである。2006年12月初め、ラルフ・シェーンフェルト（Ralf Schönfeld）が連盟の討論フォーラムにおいてKGS上での個人戦の大会を提案し¹⁵、この提案がヘーブザッカーインターネット碁杯（Hebsacker Internet Go Cup）の実施に結び付いた。『ドイツ碁新聞』2006年第6号には、「碁ブンデスリーガに並び、個のプレーヤーとして世界中の親切的な囲碁プレーヤーたちと知り合い、オンラインで彼らと対局する可能性を手にする」という願望が背景にあった旨が述べられている¹⁶。そして、ヘーブザッカー出版に並び連盟もこのアイデアを良しとし、ドイツインターネット碁杯（Deutscher Internet-Go-Pokal）が行われることになった。大会実施に向けて、代表者会議においてドイツインターネット碁杯専門事務局が創られ、局長にはヤン・エンゲルハルト（Jan Engelhardt）が就いた。ヘーブザッカーインターネット碁杯では置き碁対局が採用されたが、ドイツインターネット碁マイスターを争うドイツインターネット碁杯は、互先の対局のみによって行われることになった¹⁷。『ドイツ碁新聞』2008年第2号には、第1回ドイツインターネット碁杯が178人の参加者によって実施された旨が述べられている¹⁸。その後、この大会への参加者数は年々減少していったが、2013年4月2日に開始された第5回大会においては宣伝を改善し、賞品を増加させたことにより参加者150人となったことが、同年8月25日のカッセルでの代表者会議への招待状において、エンゲルハルトによって報告されている¹⁹。

ブンデスリーガの影響はドイツ国内にとどまらなかった。『ドイツ碁新聞』2011年第2号においては、5年間のドイツ碁ブンデスリーガの経験に基き、第1回パンダネットヨーロッパ碁チームマイスターシャフト（Pandamet Europa Go Mannschaftsmeisterschaft）が2010年11月に開始されたことが伝えられた²⁰。各国から4人で構成される1チームのみが参加、合計30チームが3リーグに分けられ、9ラウンドの対局がパンダネット・インターネット碁サーバー（Pandamet Internet Go Server）上で進められた。この大会は多くのプレーヤーたちの関心を集め、ヨーロッパのトップ100プレーヤーのうち、約95パーセントが参加した。そしてブンデスリーガにおいてと同様、かつて活発だったプレーヤーたちの復帰という現象がこのリーグによって引き起こされた。また、とりわけブンデスリーガの創設時にその専門事務局長として苦勞を重ねたハンス＝ユルゲン・コッホ（Hans-Jürgen Koch）は、この大会に自らの苦勞が実る様を見出したことだろう。この大会では、「現代ドイツの囲碁事情（1）」において詳述したブンデスリーガ創設時の彼のアイデアが実現されることとなったのである。つまり、オンライン対局によって決定された上位4チームが、ヨーロッパ碁コンGRESにおいて対面対局による決勝ラウンドを行うこととなったのであった²¹。

ドイツ、そしてヨーロッパにとどまらずさらに視野を拡大させるなら、この当時はコンピュータ囲碁の躍進の時期だったと捉えることができる。2006年、第11回コンピュータオリンピック（Computer Olympiad）の9路盤部門で優勝したCrazy Stoneには、モンテカルロ木検索（Monte-Carlo Tree Search）というアルゴリズムが用いられていた²²。2007年はモンテカルロ木検索の台頭の年となり、19路盤でMoGo、9路盤でSteenvreterが勝利、2008年には全てのメダルをモンテカルロ木検索を用いたプログラムが獲得した。さらにMoGoは2008年3月、プロ五段のカタリン・タラス（Catalin Taranu）との9路盤での

対局で1勝2敗という結果を残し、この1勝は早碁ではない対局での、コンピュータープログラムのプロ棋士に対する初勝利であった²³。そして2008年8月、MoGoはポートランドでのアメリカ碁コンgresにおいて、プロ八段の金明完と対局することとなった。この対局に向けて3000台のPCが統合されることになり、対局は9路盤、互先で行われることになっていたが、のちに19路盤での9子局、コンピューター数は800に変更され、結果はMoGoの1目半勝ちであった²⁴。

この数年前までコンピューターの棋力が七級を超えることはなかったため、上述のような事態は非常にインパクトがあったに違いない。それまでの囲碁プログラムは、定石や好形を覚え込ませたり、模様を構築できるようにさせたりというように、人間の打ち方をできる限り模倣させる試みであった。しかしこの方法においては、あまりにも多くの着手と応手の評価が必要とされた。これに対しモンテカルロ木検索では、無数の偶然の対局経過が想定された上で、その中から最終的に偶然勝利する可能性の最も高い着手が選ばれるという、それまでとは全く異なる方法が採られたのであった²⁵。

そして、ここまで述べてきた囲碁界の出来事と並行し、世界的な囲碁界の変動、つまり囲碁の国際化がこの時期に大きく前進していたことを本章の最後に指摘したい²⁶。本稿が焦点を当てた期間に先立ち、オリンピック競技種目への囲碁の採用に向けた活動が、日本棋院及び国際囲碁連盟によって行われていた。しかし1999年、国際囲碁連盟の国際オリンピック委員会 (International Olympic Committee、以下 IOC) への加盟申請は受理されず、IOC加盟は2001年に断念されることになった。その一方で、既にIOCの構成員だったチェス連盟とブリッジ連盟はこれらの競技がオリンピックの競技種目に採用されるよう尽力していたが、両者とも近い将来に競技種目に採用されることはないことがIOCによって明らかにされた。これを機に2005年、国際競技連盟連合 (General Association of International Sports Federations、以下 GAISF) に加盟する国際マインドスポーツの4団体によって新たなオリンピック運動を共同で推進するために、国際マインドスポーツ協会 (International Mind Sports Association、以下 IMSA) が創られ²⁷、北京オリンピックのインフラを利用して第1回世界マインドスポーツ競技大会 (World Mind Sports Games、以下 WMSG) を実施するというコンセプトが2006年に生み出された。その実現に向けてスポンサーを見つけることがIMSA会長兼世界ブリッジ連盟会長のジョゼ・ダミアニ (José Damiani) の任務となったが、最終的にこの大会は開催地である中国の指導の下で実現された。

『ドイツ碁新聞』2008年第3号には、大会参加のために北京に派遣されるドイツナショナルチームが、六段から二段の15人のプレーヤーたちによって形成されたことが報告された²⁸。大会報告は同紙の2008年第5号に掲載され、大会への参加者は3000人以上、そのうち囲碁プレーヤーは約600人であったこと、そして象棋も競技の1つであったことが報告されている²⁹。プロ棋士たちも参加したため、個人戦、団体戦共に東アジアの国々からの参加者が活躍する中、ドイツ女子団体チームが準々決勝進出という好成績を残した³⁰。

ここで言及した囲碁の国際化はその後も前進し、2012年に開催された第2回WMSGやGAISFから改名されたスポーツアコード (SportAccord) によるスポーツアコード世界マインドゲームズ (SportAccord World Mind Games) 等についても重野由紀が言及している³¹。このような事態は囲碁界全体にとって好ましい事態だったに違いない。しかし、ドイツ碁連盟にとっては世界的な変動に遅れを取らないよう、連盟の構成員数を増加させなく

てはならないという側面もあったようで、この点に関してはシュティアスニーが北京でのWMSGに言及する中で次のように述べている：

おそらく1つ明確なのは、構成員数が上昇しなければドイツ碁連盟も州連盟も高まる要求に応じることができないだろうということである。なぜ要求が高まっているのか。それは囲碁情勢が「…」完全にポジティブに、そして時にはまた猛烈に進展しているからである。最新の例としては2007年9月26日、北京での記者会見において第1回世界マインドスポーツ競技大会が予告された。それはオリンピック競技大会とパラリンピックの後、2008年10月3日から18日まで、北京のオリンピックの敷地内で開催されるだろう。ドイツ内には組織化された囲碁プレーヤーたちがそもそもどれほどいるのかと、潜在的なスポンサーたちがまず最初に問うことは当然である。³²

2004年から国際囲碁連盟の理事を務め、2009年にはヨーロッパ碁連盟会長に就く彼は、世界的に「猛烈に進展している」囲碁界にドイツ囲碁界も何とかついていかななくてはならないと考えたに違いない。そのためにはスポンサーが必要であり、スポンサー獲得に向けて、ドイツ囲碁界の可能性を示すための多大な連盟構成員数が望まれたのである。そして同じ頃、トリックスも同様の思いを抱いていたと思われる。長年、ドイツ囲碁界に大きな変化を見出せなかった彼女は、上述の連載記事第1回において次のように述べているのである：

今や「…」いくつかのことが変化した。私たちにはWMSGがあり、それによって囲碁には国際的に意義深い価値の上昇がもたらされた。そして私たちは今、これに適応しなくてはならない — 遅くとも今！³³

では、彼女は当時の状況に適応するために、ドイツ囲碁界にどのような変革を求めていたのだろうか。次章ではトリックスの連載記事及びそれに対する読者たちの投書を概観する。

3 アンネ・トリックスの連載記事

トリックスはドイツにおけるゴルフの発展に言及し、自らの連載記事を開始している。彼女によるとこの記事から約50年前、ドイツでゴルフはまだそれほど盛んではなく、その構成員数は1000から2000であったが、この記事が書かれた頃、その数は500000以上となっていた。これに対して構成員数2000であるドイツ碁連盟について、彼女は「私たちは何を間違えているのか」と問いかけている³⁴。約20年前からドイツ囲碁界に居合わせ、その期間の大半を連邦レベルあるいは州レベルの連盟名誉職の活動に従事しながら過ごしてきた彼女はさらに、長年の活動にもかかわらず、「囲碁が依然として周囲の99パーセントに知られていなければ、まじめなものとして評価されてもいない」ことに関して、「誰に責任があるのか」と問いかけている³⁵。そしてこのような状況の原因として、彼女は連盟の活動が戦略的でない点を次のように指摘する：

私たちは宣伝、見本市、広報活動にお金を使い、囲碁スタンドへの殺到や熱狂した人々

についての誇らしげな報告を読む。そしてそれから？ 経済に方向付けられる企業は全て、その宣伝効果を定期的に点検し […] 古い戦略が何ももたらさなかったなら、それに合わせて戦略を新たに方向付ける。私たちの戦略は何かをもたらしただのか。³⁶

連載記事第1回においてこれらの問いを投げかけたトリックスは、連載記事第2回において具体的な問題提起を開始した。それらは次のとおりである：

1. 私たちはニッチから抜け出すつもりがあるのか。[…]
2. 碁新聞と国際大会の予選大会がドイツ碁連盟の主な任務であり続けるべきか。(現在の計画では、年間予算の約50%がドイツ碁新聞に注がれ、約25%がトッププレイヤー促進のために支払われている。)
3. 次世代に向けた活動のための専門事務局は足りているのか。[…]
4. 現在用いられている宣伝手段は […] 成果を上げたのか。³⁷

この記事に続き、『ドイツ碁新聞』2010年第3号には、ここまでのトリックスの記事に対する読者の投書が掲載された。投稿者の1人であるベルント・ザムバーレ (Bernd Sambale) は、構成員数が2000程度にとどまっている点に着目し、その原因の1つは、構成員になった場合の利点が、多くの囲碁プレイヤーたちにとって活用できないものだからであるという意見を述べている。利点を活用するためには、大会に参加するために1年中ドイツを旅する時間、お金、やる気を備えている必要がある。それが可能な人にはドイツ杯や賞品獲得のチャンスがあり、少なくとも参加費の割引を受けることができる。また多くの大会を訪れることから、きっとその人にはある程度の棋力があり、運が良ければ囲碁が盛んなベルリンやハンブルクに住んでいることだろう。しかし、このような人でない場合には利点を十分に活用することができないのである。したがって、構成員数を増加させたいなら、囲碁を楽しい趣味と見なしているだけで、年に1、2回だけ大会に参加するような20級から5級のプレイヤーたちに働きかけるべきだというのが彼の意見である。彼らが構成員になることが報われるようにしなければならないのであり、ザムバーレは比較的弱いプレイヤーたちのための定期的な授業を提案している。構成員たちのみが参加できる空間をKGS内に作成し、フランツ＝ヨーゼフ・ディックフート (Franz-Josef Dickhut) 等の強いプレイヤーたちに授業を行ってもらおうのである。また、構成員たちのみが参加できるその他のイベントを増加させることもこの投書の最後に提案されている³⁸。

このザムバーレの投書と共に、『ドイツ碁新聞』に掲載されたトーマス・レデッカー (Thomas Redecker) の投書には、複数の観点から連盟の現状や様々な意見、提案が並べられている。主な点をまとめると次のようになるだろう：

- ・ドイツ碁連盟の構成員数は非常に少ない。青少年構成員数も少ない。
- ・ドイツ碁連盟の会費は極めて安価であり、連盟の経済的基盤は非常に弱い。ただし、そもそも比較的費用がかかる活動は行われていない。
- ・年間予算の50%がドイツ碁新聞に用いられているのは、何かが歪んでいるように思われる。アマチュア的なドイツ碁連盟のためのセミプロフェッショナルなドイツ碁新

聞というのは矛盾している。

- ・紙媒体版だけでなくインターネット版のドイツ碁新聞を作成し、それぞれの構成員にどちらを利用するかを選択させる。
- ・インターネット碁は無関心や拘束力の欠如への傾向を伴う共同体であり、ヘープザッカーインターネット碁杯への参加者は数年間で大きく減少した。
- ・青少年に向けた活動の成功が、構成員増加に結び付いていない。
- ・囲碁を影のような存在でなくするためには、皆の計画的な共同作業が必要。³⁹

これらの投書に続くトリンクスの連載記事第3回においては、青少年に向けた活動が最大のテーマとなっており、ドイツ囲碁界の未来・展望が子供及び青少年向け活動と緊密に関連していることが言及されている。このテーマに関連し、彼女は当時のルーマニアの子供たちの棋力の高さに注目し、マリア・ヴォーニヒ（Maria Wohnig）によるタラヌへのインタビューを掲載している。このインタビューからは、ルーマニアに10歳以下、12歳以下、16歳以下、18歳以下という4カテゴリーに区分されたジュニア・ナショナルチームがあり、それぞれのカテゴリーに8人が属していること、そしてナショナルチームはトレーニングキャンプを行うということがわかる。またタラヌは、段レベルの棋力を有し、青少年たちとの関わり方に関する教育的知識を持った囲碁の先生が必要という意見を述べている。そして子供たちの親からの支援を得るために、囲碁が単なる暇つぶしのゲームではないことを親に理解してもらうことが必要という主張も展開されている⁴⁰。

さらにトリンクスの連載記事4回においては彼女がgo4schoolに送った手紙、そしてそれに対するgo4school新会長トーマス・ブルックシュ（Thomas Brucksch）の返答が掲載されている。彼女はまずドイツ囲碁界の現状分析として、「子供たち及び青少年たちに向けた活動のための着実なコンセプトが私たちには欠けている」と述べている。その上で彼女は、go4schoolの活動として認識できるのは、ハンス・ピーチュ・メモリアルを組織することのみであるという辛辣な主張をしている。そして更なる活動が行われなくてはならない分野として「囲碁の先生たちの専門教育、その修了証書の授与」、「教育的手段としての囲碁」という2点に言及している。とりわけ後者については、どれほど子供たちを囲碁教育によって育成することができるかという研究成果があるものの、教員や親が囲碁を単なる遊びとして見なしている限りは、囲碁を授業科目や学校の教育コンセプトの要素とすることはできるとは主張し難い、とトリンクスは述べている。そして彼女は、これらの2点に対する意見をgo4schoolの会長と構成員たちに求めている⁴¹。

これに対する返答の中で、ブルックシュはまずgo4schoolが単独で青少年のための活動を行うのではなく、ドイツ碁連盟とgo4schoolが活動の中で調和することを望む旨を述べている。その上で彼は、ハンス・ピーチュ・メモリアルの際に開催される世話人たちの会議において、囲碁の先生たちの情報交換が行われることに触れ、ドイツ碁連盟ではそのような会議がどのようなテーマのものであれ、行われていないことを残念に思うと述べている。また囲碁の棋力のみならず、囲碁による教育の質を上げることはgo4schoolの関心事であるものの、そもそも囲碁プレーヤーが教員として認知されることはほぼなく、囲碁の授業を行う教員がいても、それは単独での奮闘となっているという事態が指摘される。さらに、この点におけるドイツ碁連盟のコンセプトはなく、事実上連盟が囲碁の先生やトレーナー

の促進を行っていないことも指摘されている⁴²。

4 次稿に向けて

前章において示した通り、トリンクスの記事や読者の投書、そしてブルックシュの返答には、ドイツ囲碁界を改革するための様々な提案が含まれていた。しかし実は、『ドイツ碁新聞』に掲載されることはなかったものの、当時のドイツ囲碁界や連盟の状況について「ドイツにおいて今日、囲碁の状況は非常に良好である」という意見の投書を送る者もいた⁴³。その筆者マティアス・ライマン (Matthias Reimann) はまず次のように述べている：

このような [ドイツの大部分の] プレーヤーたちにとって最も重要なのは、ドイツ碁新聞と、インターネット上にドイツ碁連盟が存在することである。[...] ドイツ碁新聞は今日、ドイツの囲碁の歴史において最も良い状況にある。[...] ドイツ碁新聞はドイツの囲碁の看板であり、少なくともヨーロッパ内では例を見ない。この状況は何としても保たれるべきだろう。⁴⁴

その上で、彼の意見は「その [ドイツ碁新聞の] ために会費が支払われるのであるが [...] しかしさらにより多くのことのために支払うというのだろうか」と続く。ドイツ碁連盟の安価な会費の指摘と共に、他クラブ等の高価な会費を紹介することで、連盟の会費値上げ要求をおわせるレデッカー⁴⁵ に対し、値上げを行っても効果は生み出されず、ただ構成員を失う結果になるだろうことをライマンは危惧しているのである。彼によると過去40年、ヨーロッパにおいて多くの興味深い囲碁プロジェクトやコンセプトは、それを実践に移す力とお金を必要としたものの効果なく終わった。ドイツにおける現況がまさに囲碁界なのであり、当初構成員の大幅増加を約束したにもかかわらずその数2200にとどめることとなった「ヒカルの碁の波」においても、そのことは確認される。「そういうものなのだ」という意見の彼は、会費を増加することで実施されるプロジェクトに反対しているのである⁴⁶。

この当時、革新を望む者とそうでない者のどちらが多数派であったかは不明である。しかし、トリンクスの記事連載の後に即座に変革が起こることはなかったというのが事実であり、2013年、彼女の連載記事の悲しみと諦めに満ちた「結び」が討論フォーラムに掲載された⁴⁷。このスレッドはアンネのモンスタースレッド (Annes Monster-Thread)⁴⁸ と呼ばれるほどの大討論の場となり、このスレッドからさらに新たなスレッドが派生していくこととなった。これらの討論からドイツ囲碁界の様相をさらに示すことが、次稿の課題となる。

¹ 杉浦康則：ドイツ囲碁史研究 (1) [『独語独文学研究年報』第44号、2018年、127-142頁]。

² Tobias Berben: Mitgliederentwicklung 2004. In: Deutsche Go-Zeitung (2004), Heft6, S.9.

³ 杉浦康則：現代ドイツの囲碁事情 (2) [『北海道言語文化研究』第18号、2020年、47-72頁]。

⁴ 同上、48頁。

⁵ 公益財団法人日本生産性本部：レジャー白書2011(文栄社)2011, 40頁。／公益財団法人日本生産性本部：レジャー白書2014(情報印刷)2014, 63頁。2009年に数値が急増しているが、これは「2009年より、調査手法を訪問留置法からインターネット調査に移行した」結果である。Vgl. 同上。

⁶ <http://forum.dgob.de/index.php?topic=2769.0>, Wieviel Mitglieder hat eigentlich der DGoB, Martin Stiassny, 30.09.2007 21:13. 討論フォーラムへの投稿を文献として注に挙げる際の形式については、

- 次の文献を参照。杉浦 (2018), 128頁。また、シュティアスニーは2009年にヨーロッパ碁連盟 (Europäische Go-Föderation) の会長となった。このことは『ドイツ碁新聞』2009年第4号にも報告されている。Vgl. Michael Marz: Bericht des Präsidenten. In: Deutsche Go-Zeitung (2009), Heft4, S.2-7, hier S.4.
- ⁷ Uwe Schweinsberg: 2 Bericht des Schatzmeisters. In: Michael Marz: Einladung zur ordentlichen Delegiertenversammlung 2010 in Castrop-Rauxel, S.3-4, hier S.3. この招待状は、かつてドイツ碁連盟の旧ホームページから入手することができた。その際のアドレスは次の通りであった。http://www.dgob.de/index.htm?dgob/dv_dokumente/index.htm 本稿では他の年の招待状及び代表者会議の議事録も文献として取り扱われるが、それらは同じアドレスから入手したものである。
- ⁸ http://forum.dgob.de/index.php?topic=4892.0 (800), Maxime des DGoB... - Schluss, Alfred Ebert, 29.01.2013 20:21.
- ⁹ Anne Trinks: Maxime des DGoB - Tradition oder Innovation? (3). In: Deutsche Go-Zeitung (2010), Heft4, S.28-31, hier S.28.
- ¹⁰ 既に2006年10月25日、ミヒヤエル・マルツ (Michael Marz) によって「ドイツにおけるヨーロッパ碁コンGRESS」というスレッドが作成され、ドイツ碁連盟が2012年に碁コンGRESSを開催するつもりであること、そしてヨーロッパ碁連盟がこのアイデアを支持していることが告げられた。その上で、ドイツのどこで開催するかという問いを彼が投げかけると、その日の内にホルスト・ティム (Horst Timm) が「ケルンが適している」と回答している。Vgl. http://forum.dgob.de/index.php?topic=2314.0, Europäischer Go-Kongress in Deutschland, Michael Marz, 25.10.2006 11:21. / Ebd., Horst Timm, 25.10.2006 17:50. また、ティムは2007年11月16日、ノルトライン＝ヴェストファーレン、あるいはケルンでコンGRESSを開催することが可能だと思いかと約半年前に問われ、モニカ・ライムペル (Monika Reimpell) 等と連絡を取り合った旨をスレッド上で述べている。この際に彼は、ケルンが文化的に十分興味深く、ノルトライン＝ヴェストファーレン組織チームが存在し、ケルンのドイツ (Deutz) 社のユースホテルが中心地として適しているという結論に至っている。Vgl. http://forum.dgob.de/index.php?topic=2805.0 (160), egc 2012 in deutschland, Horst Timm, 16.11.2007 13:43.
- ¹¹ 『ドイツ碁新聞』2009年第5号には、碁コンGRESSに向けて500以上のベットを備えたケルンのドイツ社のユースホテルが予約されたことや、トゥスネルダ通りのギムナジウムを借りることができる旨等がティムによって述べられている。そして数人の協力者たちの名も挙げられ、次第に組織チームが形成されていく様子も述べられている。また、ロゴコンクールが行われ、2012年のヨーロッパ碁コンGRESSのロゴとして、ケルン大聖堂とライン川をモチーフとしたハンカ・ゴア (Hanka Gohr) による案が採用されたことも報告されている。Vgl. Horst Tim: EGC 2012 in Köln. In: Deutsche Go-Zeitung (2009), Heft5, S.2-3. / Gunnar Dickfeld: EGC-Logo. In: Deutsche Go-Zeitung (2009), Heft5, S.3-4. しかしその後、碁コンGRESSに向けた活動に進展がなかったことは、2010年6月11日のスレッドへの投稿に示されている。Vgl. http://forum.dgob.de/index.php?topic=2805.0 (160), egc 2012 in deutschland, makko, 11.06.2010 15:04. そして、同スレッドへの同年6月17日9時19分のライムペルの投稿から、ようやく活動が本格的に開始されたことがわかる。Vgl. Ebd., Monika, 17.06.2010 09:19. また、2010年3月12日にカストロプ＝ラウクセルで開催された代表者会議の議事録において、ティムが碁コンGRESSの組織リーダーの役職を退いた旨が述べられている。Vgl. Protokoll der DGoB-Delegiertenversammlung Castrop-Rauxel, 12.03.2010.
- ¹² 2010年7月17日、マルツはケルン以外の開催地を探し始めたことを討論フォーラムにおいて次のように述べている。「これまで検討されてきたケルンの予定地は適していない、あるいはあまりにも高価すぎるため、探索の半径が多少拡大された。」Vgl. http://forum.dgob.de/index.php?topic=2805.0 (160), egc 2012 in deutschland, Michael Marz, 17.07.2010 12:09. そして同年7月22日に開催地となるパート・ゴードスベルクへの訪問が行われたことが、ライムペルによってその翌日に伝えられた。Vgl. Ebd., Monika, 23.07.2010 20:27. また、同年12月23日のライムペルの投稿からは、開催地との契約締結が間近であることを確認することができる。Vgl. Ebd., Monika, 23.12.2010 20:19.
- ¹³ 2000年から連盟副会長を務めていたマルツは、2007年3月17日のエアランゲンでの代表者会議において連盟会長に選ばれた。Vgl. Der DGoB-Vorstand: Neuer DGoB-Vorstand. In: Deutsche Go-Zeitung (2007), Heft2, S.3-5, hier S.3.
- ¹⁴ Guido Tautorat: Der Europäische Go-Kongress 2012 in Bonn. In: Deutsche Go-Zeitung (2012), Heft4, S.10-30. ドイツでの碁コンGRESSが参加者たちから高評価を得たことは、2013年8月25日にカッセルで開催された代表者会議の招待状にも言及されている。Vgl. Michael Marz: 1 Jahresbericht des Vorstands. In: Michael Marz: Einladung zur ordentlichen Delegiertenversammlung 2013 in Kassel, S.3.
- ¹⁵ http://forum.dgob.de/index.php?topic=2365.0 (40), Pokalturnier für alle?, ehemaliges Mitglied, 1.12.2006 19:40.
- ¹⁶ Tobias Berben: Hebsacker Internet Go Cup. In: Deutsche Go-Zeitung (2006), Heft6, S.4.

- ¹⁷ Jan Engelhardt: Deutscher Internet-Go-Pokal. In: Deutsche Go-Zeitung (2007), Heft2, S.6.
- ¹⁸ Jan Engelhardt: Deutscher Internet-Go-Pokal. In: Deutsche Go-Zeitung (2008), Heft2, S.3.
- ¹⁹ Jan Engelhardt: 2.5 FS DGoP. In: Michael Marz: Einladung zur ordentlichen Delegiertenversammlung 2013 in Kassel, S.7. ドイツ碁ブンデスリーグの創設時と同様、ヘーブザッカーインターネット碁杯及びドイツインターネット碁杯の開催に至るまでには、討論フォーラムにおいて様々な意見が投げかけられた。Vgl. <http://forum.dgob.de/index.php?topic=2395.0> (80), Hebsacker Internet Go Cup (HIGC), Tobias Berben, 29.12.2006 00:59. / <http://forum.dgob.de/index.php?topic=2528.0>, Ankündigung: Deutscher Internet-Go-Pokal (DGoP), Jan1337, 27.03.2007 17:45. / <http://forum.dgob.de/index.php?topic=2680.0> (160), Anmeldung zum 1. Deutschen Internet-Go-Pokal gestartet, Jan Engelhardt, 31.07.2007 00:08. これらのスレッドのうちとりわけ最後のスレッドには、ドイツインターネット碁杯創設時のエンゲルハルトの苦難が示されている。
- ²⁰ 『ドイツ碁新聞』2009年第2号においてシュティアスニーは、フローニンゲンでのヨーロッパ碁連盟年次総会で、ナショナルチームのためのヨーロッパリーグを提案したいと述べている。Vgl. Martin Stiassny: Go international – ein Ausblick. In: Deutsche Go-Zeitung (2009), Heft2, S.2-5, hier S.5. また、ブンデスリーグ専門事務局長でもあったシュティアスニーがヨーロッパリーグ創設に専念するために、ピエール＝アラン・シャモ (Pierre-Alain Chamot) がブンデスリーグ専門事務局長を引き継いだことを次の文献から確認できる。Vgl. Pierre-Alain Chamot: Die Bundesliga ist auf Kurs. In: Deutsche Go-Zeitung (2011), Heft5, S.14-15, hier S.14. / Martin Stiassny: 2.5 FS Bundesliga. In: Michael Marz: Einladung zur ordentlichen Delegiertenversammlung 2011 in Gießen, S.7.
- ²¹ Martin Stiassny: Pandanet Go-Team-EM. In: Deutsche Go-Zeitung (2011), Heft2, S.34. ドイツ碁ブンデスリーグの決勝ラウンドを対面対局で行うというアイデアは、ホルスト・ツァイン (Horst Zein) のものでもあった。Vgl. Ebd., S.4.
- ²² 19路盤では古典的プログラムのGnuGoが優勝した。Vgl. Ingo Althöfer: Späte Ernte. In: Deutsche Go-Zeitung (2008), Heft5, S.49-51, hier S.49.
- ²³ Ebd., S.49-50. 19路盤での9子局も行われ、タラヌが勝利した。Vgl. Ebd., S.50.
- ²⁴ Bodo Zinser: Die letzte Bastion der menschlichen Intelligenz. In: Deutsche Go-Zeitung (2008), Heft4, S.45-49, hier S.45.
- ²⁵ Ebd., S.45-47. 本稿では『ドイツ碁新聞』における叙述をもとにモンテカルロ木検索を用いた囲碁プログラムやそれ以前の囲碁プログラムについて述べたが、それらのより詳細な叙述としては次の文献が挙げられる。美添一樹: モンテカルロ木探索 - コンピュータ碁に革命を起こした新手法 [『情報処理』第49巻第6号, 2008年, 686-693頁]。 / 伊藤毅志: コンピュータ碁研究の歩み [『人工知能学会誌』第27巻第5号, 2012年, 497-500頁]。
- ²⁶ この段落の記述には次の文献を参照した。重野由紀: 国際碁連盟のなりたちと今後の課題 [『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』第16号, 2014年, 283-301頁]。 / Martin Stiassny: Beijing 2008: Sommerspiele, Paralympics und WMSG. In: Deutsche Go-Zeitung (2008), Heft1, S.4-6.
- ²⁷ GAISF加盟の4団体とは、チェス、ブリッジ、囲碁、ドラフツである。国際碁連盟は2002年にGAISFへの加盟申請を理事会及び総会で決定、2004年に申請を提出、2005年に準加盟、2006年に正加盟を果たした。Vgl. 重野, 291-292頁。
- ²⁸ Tobias Berben: Die Mannschaft für China. In: Deutsche Go-Zeitung (2008), Heft3, S.7.
- ²⁹ Robert Jasiek: Ein Bericht. In: Deutsche Go-Zeitung (2008), Heft5, S.23-26, hier S.23.
- ³⁰ Bernd Radmacher: Ein Bericht. In: Deutsche Go-Zeitung (2008), Heft5, S.17-21, hier S.20-21.
- ³¹ 重野, 294-297頁。
- ³² <http://forum.dgob.de/index.php?topic=2769.0>, Wieviel Mitglieder hat eigentlich der DGoB, Martin Stiassny, 30.09.2007 21:13.
- ³³ Anne Trinks: Maxime des DGoB: Tradition oder Innovation? In: Deutsche Go-Zeitung (2010), Heft1, S.28-30, hier S.29-30.
- ³⁴ Ebd., S.28.
- ³⁵ Ebd., S.28-29.
- ³⁶ Ebd., S.29.
- ³⁷ Anne Trinks: Maxime des DGoB: Tradition oder Innovation? (2) In: Deutsche Go-Zeitung (2010), Heft2, S.37-40, hier S.40.
- ³⁸ Bernd Sambale: Ein Leserbrief. In: Deutsche Go-Zeitung (2010), Heft3, S.20-21.
- ³⁹ Thomas Redecker: Ein Leserbrief. In: Deutsche Go-Zeitung (2010), Heft3, S.18-20.
- ⁴⁰ Anne Trinks: Maxime des DGoB - Tradition oder Innovation? (3). In: Deutsche Go-Zeitung (2010), Heft4, S.28-31.
- ⁴¹ Anne Trinks: Liebe Go-Freunde! In: Maxime des DGoB - Tradition oder Innovation (4). In: Deutsche Go-Zeitung (2010), Heft5, S.18. go4schoolについては次の文献を参照。杉浦 (2020), 61-62頁。

現代ドイツの囲碁事情（3）

⁴² Thomas Brucksch: Liebe Anne. In: Maxime des DGoB - Tradition oder Innovation (4). In: Deutsche Go-Zeitung (2010), Heft5, S.18-19, hier S.19.

⁴³ <http://forum.dgob.de/index.php?topic=4892.0> (800), Maxime des DGoB... - Schluss, Brockenhexe, 27.01.2013 20:19.

⁴⁴ Ebd.

⁴⁵ Redecker, S.18.

⁴⁶ <http://forum.dgob.de/index.php?topic=4892.0> (800), Maxime des DGoB... - Schluss, Brockenhexe, 27.01.2013 20:19.

⁴⁷ Ebd., Anne Trinks, 25.01.2013 20:11.

⁴⁸ <http://forum.dgob.de/index.php?topic=5095.0> (80), Warum in den DGoB eintreten?, Weiqi5, 23.08.2013 07:27.